



## 「文化」と「文明」

なかせ こひろし  
中世古 廣司

『TOKYO2020』の希望に満ちて迎えた本年が、このような事態に陥っていようと誰が予測しえただろうか。新型コロナウイルスという未知で目に見えぬ難敵と向き合う日々の中で、いつにも増して重苦しく筆を執りはじめた。

さて、本年4月、癌を患い余命宣告を受けながらも創作意欲を絶やさず、芸術魂を燃やし続けてきた映画監督・大林宣彦氏が他界した。

大林氏が生まれ育ったふるさとは、情緒豊かな瀬戸内の港町・尾道。大林映画にとってかけがえのない舞台ともなった尾道は、やがて押し寄せる高度経済成長の波に乗り、新幹線の新駅設置や大型道路の開通など目覚ましく近代化の一途をたどった。その変貌したふるさとの姿を目の当たりにした大林氏は、「尾道よ。文明の尻尾たるより、文化の頭たれ」という名言を発し、その後20年近く尾道を舞台とする映画製作を断念したという。

厳しさの中にも郷土愛がにじむことばには「そこに無いものに憧れる力を『文明』、もともとそこに在るものを尊ぶ力を『文化』とする、大林氏の「文化・文明論」が息づいている。

また、クリエイティブディレクター・水野学氏とパブリックスピーカー・山口周氏との共著『世界観をつくる』において、実に興味深い「文化・文明論」が披瀝されている。

その中から私なりに読み取った要点を以下に記したい。

価値には、「意味がある価値」と「役に立つ価値」とがある。

それらは、「役に立つ価値」がもたらすものを「文明」、「意味がある価値」が生み出すものを「文化」と換言できる。

この間、民間企業をはじめ、多くの人々は総じて「役に立つ価値」を追求し続けてきた。その結果、いまや「役に立つ価値」は私たちの身の周りに過剰となり、逆に「意味がある価値」が希少となっている。この現象は、「まずは文明が進み、それを文化が後追いつく」という、日本がこれまで繰り返してきた歴史に適わず文明偏重の時代と化している証左である。

この水野・山口両氏の「文化・文明論」は、「デジタル革命による文明の進展をみたいまこそ、それに呼応する新たな文化の創造が不可欠である」と説いているものであり、同時にこの考え方は前述の大林氏のそれとも通底している。

一方、かねてより私は「不易流行」を座右の銘と据え、公私にわたる生き方・考え方の礎としてきた。

この「不易流行」とは、元禄期の昔、何らの交通手段も持たない時代に140日余りをかけて東日本大震災の被災地でもある仙台から松島、そして、石巻を経由して平泉へと約600里(2,400km)の道程を『おくのほそ道行』として踏破した希代の俳人・松尾芭蕉が残したことばであり、蕉風俳諧の理念のひとつともされている。この「不易流行」の解釈には諸説あるものの、今日的には「いつまでも変わらないこと＝不易」の中に「時代に応じて変化すること＝流行」を取り入れていくこと、つまり「変えてはならないこと」と「変えるべきこと」をしっかりと

りと見極め、それらを融合させながら新たな時代を切り拓いていくことの大切さを説いたものであるとされている。

私は、『おくのほそ道行』から約330年もの時を経た、厳しさと難しさが併存する現代にあっても、それらを克服し打開するためには「不易流行」の考え方こそが不可欠であると信じて疑わない。つまり、『『不易』を実践するためには、折にふれて『原点回帰』を図る。『流行』を実践するためには、たゆまぬ『新陳代謝』を促す』という生き方・考え方を実践することが今日の時代には必須であると考えてきた。

そこで、前述の大林・水野・山口三氏による「文化・文明論」と、この「不易流行」の考え方を一体化して捉えてみた。その結果、「もともとそこに在るものを尊ぶ力＝意味がある価値＝文化」を「不易」とすれば、「そこに無いものに憧れる力＝役に立つ価値＝文明」を「流行」と定義づけられるという発想に至った。しかし、その根底には、「文化」と「文明」とを二項対立の関係におくのではなく、両者が互いに相乗しつつ両立する関係を構築していなければならない。このように考えれば、「不易流行」の真髓が、「原点回帰」と「新陳代謝」を繰り返すことにより新たな「文化」の創造と新たな「文明」の進化を導くことにあると確信できた。

翻って、「共済」を主体とする協同組合においてもSDGs活動の一翼を担ういまこそ、共済の事業と運動における価値を再構築すべき時期にあるといえる。

その役割と責任を果たすためには、「たすけあい」という精神や理念を「意味がある価値＝文化」として創造しつつ（＝「不易」）、その一方でデジタル技術を駆使した商品やシステムを「役に立つ価値＝文明」として進化させる（＝

「流行」）ことにより、広く社会に貢献していこうとする視点に立った発想と行動が求められている。大林氏の名言を拝借し、私なりの郷土愛をこめて「共済よ。文化・文明の頭たれ」と声を大にしてエールを送りたい。

本稿の推敲を重ねているうちに暦はずでに7月半ばを過ぎた。依然としてコロナ禍の日々は続いている。残された紙幅の関係上、ことば足らずから誤解を生む恐れもあるかと思うが、コロナ禍への対応と前述の三氏による「文化・文明論」とを対比させ、雑感を記してみたい。

日本が第1波を凌いだ要因として、いわゆる「日本モデル」を挙げる識者が少なくない。これは、日本国民の持つ「精神文化」によるところが大きい。いわば「日本モデル」とは、映画・音楽・スポーツなどが生み出すさまざまな「意味がある価値」を封印した上で、臨機応変にして本質を貫こうとする国民の突き詰めた「自律の精神文化」の力によって功を奏したものだといえよう。その反面、IT基盤の脆弱さや抜本的な政策を提示できない政治のありようをみると、直面した危機に応じて発揮されるべき「役に立つ価値」の力がいかに心許ない現状にあるかということを感じた。今般のコロナ禍への対応が、三氏による「文化・文明論」の示した問題提起とは真逆の様相となっていることに強い危惧を抱かざるをえない。

今後、ウィズコロナ・アフターコロナの時代を迎え、治療薬やワクチンの開発を含めた「文明」の進化と、新たなライフスタイルやワークスタイルに基く「文化」の創造により、いかなる社会が創出されるのか、その期待と不安のないまぜにしたまま拙稿の筆を置くことにする。

（こくみん共済 coop 顧問／前理事長）